長者小

確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり

～全員参加を目指した「聞く」ことへの指導の工夫～

（３年計画の４年次）

校長　　島浦　靖

１　研究主題について

(1)　教育目標具現化の立場から

青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域社会との連携のもと学校経営に創意工夫をこらし、教育目標「めあてをもって自ら学ぶ子」の育成に取り組んでいく。その根幹として校是である「徳と知識を磨く」という基本理念を共有し、“笑顔いっぱいの学校”を目指している。学校は、子どもたちにとって学ぶ楽しさを実感できるところでなければならない。その基盤となる学級に受容的・共感的な支持的風土が溢れるとき、子どもは、自分自身が受け入れられ、認められ、かけがえのない存在であることを実感し、学ぶ力が育まれると考えた。

この３年間、感染症拡大防止の観点から、個人研究や学年・ブロック研究という形態で校内研究を行ってきた。今年度は、昨年度までの研究で培ったものを全教員が共有し、みんなができる普段使いの授業を目指して研究を進めていくことにした。

そこで本校では「人との関わりを意識した子どもの育成」を学校目標とし、学習指導と学級経営において、次のことに取り組んでいく。学習指導では、考えの根拠や理由を導く確かな「見方・考え方」を育てるために、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫を、日常的な授業実践を通して明らかにしていく。学級経営では、月別生活目標への取組や特別活動の実践、ソーシャルスキル・アンガーマネジメントの指導を通して、安全・安心な生活を送る中で、人との関わり方について具体的に学ばせる。そして、子どもたちの夢や志の実現に向け、生涯にわたって重要な働きをする「見方・考え方」を育成する本研究は、本校の目指す子ども像“笑顔いっぱいの子ども”を具現化するために有効であると考え、研究主題を設定した。

(2)　児童の実態から

昨年度の研究では、導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に学びの必要感を与え、意欲的に学習に取り組ませることが確かめられた。「聞く」ことを発展させるために、日常の授業において教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（ファシリテータ機能）を工夫したことによって、児童の聞こうとする意識が高まり、自分の言葉で言い換えることができるようになった。しかし、「見方・考え方」をより確かなものに育てるためには、児童が自分ごととして課題に取り組むこと、共感的に話を聞くことが必要である。そのためには、問題へのつぶやきや疑問を明確にしたり、自分の立場や考えを表現したりする手立ての工夫が求められる。また、児童全員が主体的・対話的に課題解決に取り組めるよう、児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけの日常化やより発展的な研究が必要である。特に、聞く力が弱い児童やうまく話せない児童には、特別支援教育の視点を生かした手立ての工夫や共有が有効であると考えた。

そこで今年度は、「全員参加を目指した『聞く』ことへの指導の工夫」として、人の話を共感的に聞かせ、児童の発言をつないで引き出す教師の言葉がけや、特別支援教育の視点を取り入れた指導を工夫することによって、物事を捉える力の育成を目指す。

課題解決に向けて、多様な「見方・考え方」を認めることで児童の思考が広がり、深化するとともに、一人一人の個性を尊重することで、「自分でもできる」という自己有用感が高められ、努力目標の「進んで学ぶ子」の育成につながるものと考える。

２　研究のねらい

考えの根拠や理由を導く確かな「見方・考え方」を育てるためには、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫が必要であり、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

日常の授業実践を通して、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫は、児童の考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を育てることができる。

４　研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の２点を示す。

(1)　導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫が、日常の授業において実践できているかについて検証する。

(2)　児童の発言をつないで引き出す教師の言葉がけや、特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫が、全員参加を目指した「聞く」ことの指導に効果があったか検証する。

5　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名	成果・授業の概要
7	10	【要請訪問】 第１回授業研究　低学年ブロック 国語科「スイミー」 ２年２組　教諭　福士　玲菜 指導助言 教育指導課　中村　美穂　主任指導主事	本時は、登場人物の行動や出来事から、登場人物の気持ちを想像する学習である。 教師が問い返したり、聞き比べをさせたりする言葉がけを通して、児童は本文の言葉に着目し考えをより深めることができた。
9	13	第２回授業研究　高学年ブロック 学級活動（３） 「将来のために」 ６年２組　教諭　山崎　孝裕	本時は、将来就きたい職業について話し合う活動を通して、働くことの意義を考える学習である。 児童の発言をつないだり引き出したりする教師の言葉がけによって、聞こうとする態度や互いを理解しようとする態度を養うことができた。
10	31	第３回授業研究　中学年ブロック 算数科 「何倍でしょう」 ３年２組　教諭　伊藤　定宏	本時は、３つの数の数量関係を順に考えたりまとめて考えたりして解く方法を見つける学習である。 テープ図や関係図を用いて多様な考え方や解き方を話し合わせる活動によって、「聞く」ことへの全員参加や思考の深化を促すことができた。

(2)一般研修

月	日	内容・講師	
6	28	特別支援教育に関わる研修会①指導計画	なかよし学級　担任　前田　健一
7	12	救命講習会	養護教諭　中田　幸恵
8	22	アンガーマネジメント研修	一般社団法人アンガーマネジメントジャパン 理事長　佐藤　恵子
10	11	特別支援教育に関わる研修会②コグトレ	なかよし学級　担任　前田　健一
10	26	心のケア研修	八戸学院大学短期大学部　教授　野口　和也
2	14	特別支援教育に関わる研修会③	なかよし学級　担任　前田　健一

6　研究の成果

(1) 導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に必要感をもたせたり、参加意欲を高めたりすることができ、課題に対して主体的、能動的に取り組ませることにつながった。

(2) 全員参加を目指した「聞く」ことの指導のために、日常の授業において教師が児童の発言をつないで引き出す教師の言葉がけ（ファシリテータ機能）を工夫したことによって、児童が自然につながり、互いの意見を聞いて自分の言葉で言い換えたり、付け足したり、比べたりすることができるようになった。

(3) 特別支援教育研修では、八戸短期大学の野口和也氏やアンガーマネジメントジャパンの佐藤恵子氏、特別支援学級担任の研修を受けることによって、児童理解が深まり、日常の言葉がけや指導に生かすことができた。

7　研究の課題

(1) 児童の確かな「見方・考え方」を育てるために、導入から課題設定までに、解きたい、解かずにはいられない状況をつくり出し、他者との協働による問題解決の過程を楽しませることが重要である。そのために、特別支援教育の視点を生かした手立ても更に工夫しながら、全員参加の授業を展開することで、より多くの児童の発言を引き出す必要があると考える。

(2) 児童が「やればできる」という思いをもちながら、最後までねばり強く課題解決に向かうために、教師は学級の受容的・共感的な支持的風土づくりに努め、授業における児童の発言をつないで引き出す言葉がけを日常化するとともに、一時間の授業や単元を通して自己の変容を児童自身にとらえさせ、自己肯定感を高める指導の工夫が必要であると考える。

（記入者　吹越　直美）